

天 理 市

平 等 坊 ・ 岩 室 遺 跡

発 掘 調 査 概 報

1 9 8 8

天理市教育委員会

正 誤 表

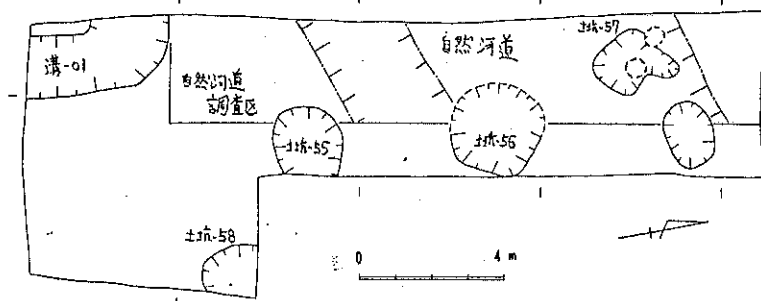


図5 弥生時代前期の遺構平面図 (S 1/200)

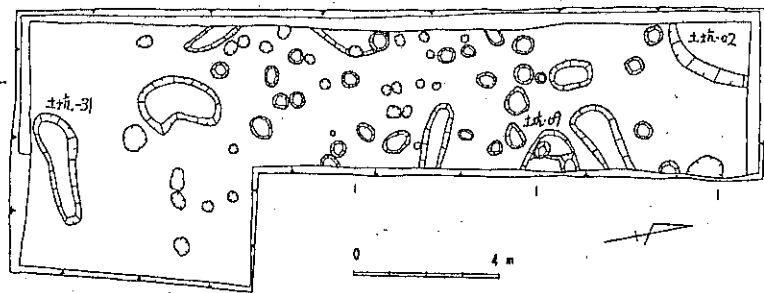


図7 弥生時代中、後期の遺構平面図 (S 1/200)

※ 図8～図14まで スケール不統一
定規に従う。

図2 調査地点図 1～7までの数字は調査次数を表わす

序 文

このたび、昭和62年度におこないました平等坊・岩室遺跡の第7次発掘調査概報を発刊することになりました。

天理市は、大和盆地の平野部から東側高原地帯にかけて位置し、景観の変化に富む地形をなしていますが、特に山地と平野との境にあたる盆地の東側山麓地帯には数多くの古墳があり、日本の国家起源を考えてゆくにおいて重要な地域でもあります。

平等坊・岩室遺跡は、盆地の平野部に所在する弥生時代の集落遺跡ですが、すでに大正7年に学術調査がおこなわれ、田原本町の唐古・鍵遺跡とともに歴史的に貴重な資料が眠っている遺跡でもあります。

市教育委員会としましては、平等坊・岩室遺跡の発掘調査の記録を発表することにより、多くの方々に、御活用いただければ幸いに存じます。

調査に御協力いただいた村田郁朗氏をはじめ各位に感謝申し上げますと共に、今後の文化財行政に協力いただきますようお願いいたします。

昭和63年3月30日

天理市教育委員会

教育長 菅 原 薫

例 言

1. 本概報は、天理市岩室町79番地-2（字クラノ後）地区において住宅建築に伴う事前調査として、天理市教育委員会が昭和62年度国庫補助を受けて、実施した第7次平等坊・岩室遺跡の発掘調査概要報告である。
2. 調査に際しては、土地所有者の村田郁朗氏をはじめ、地元の方々に多大な協力を受けた。
また発掘調査では、山田圭子（奈良大学OB）、福島永（奈良大学）、田淵弥生、吉村とも子、諸氏の調査補助を受けた。
3. 発掘調査の担当、本概報の執筆、編集は松本洋明が行ない、土器実測、図面作成を福島永（奈良大学）が行なった。

目 次

I はじめに	2
II 調査の概要	4
(1) 基本土層	4
(2) 弥生時代前期の遺構	4
(3) 弥生時代中・後期の遺構	7
III 出土土器について	8
IV 出土石器について	16
V ま と め	16

I はじめに

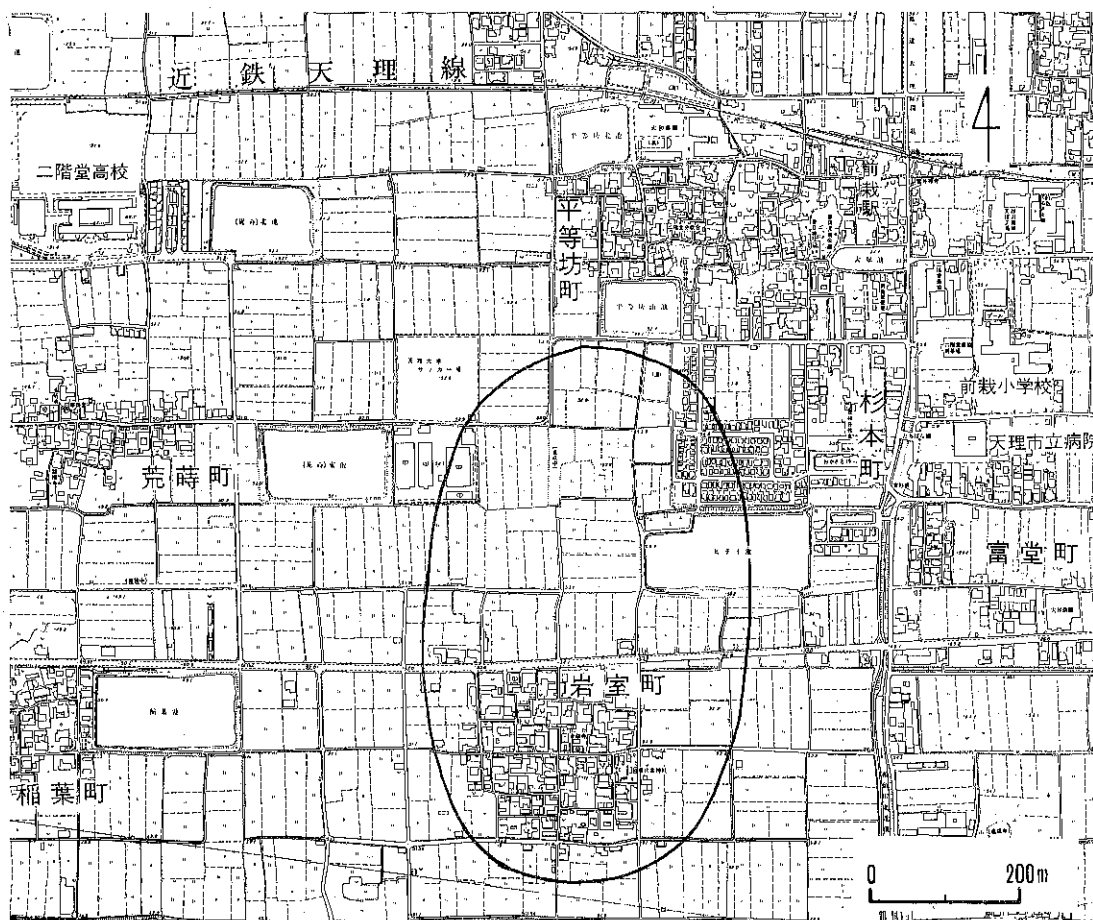


図1 遺跡の位置図 (S/10000)

天理市の北西部、近畿日本鉄道の前栽駅より南西 500mにある平等坊町から岩室町にかけての水田地帯に平等坊・岩室遺跡が所在している(図1参照)。

平等坊・岩室遺跡の発掘調査は、大正7年に奈良県史蹟勝地調査会によって^{註1}学術調査がおこなわれ、今回の調査を含めると7次にわたって調査がおこなわれたことになる。その結果、弥生時代前期から後期にかけての大和盆地の弥生時代歴代集落の一つとして位置づけられ、また近年の調査成果によって集落の北東部を限る弥生時代中期(第三様式)の大溝と弥生時代後期の^{註2}大溝が検出され、弥生時代中期から後期にかけて大溝を伴う集落であったことが明らかとなっている。

なお、平等坊・岩室遺跡は、市街化調査区域にあるが、調査地点が集中しているヒライ池の北側では第二種住居地域に位置するため、今後も宅地開発に伴う工事が遺跡の北東部で続けられる可能性が大きい。

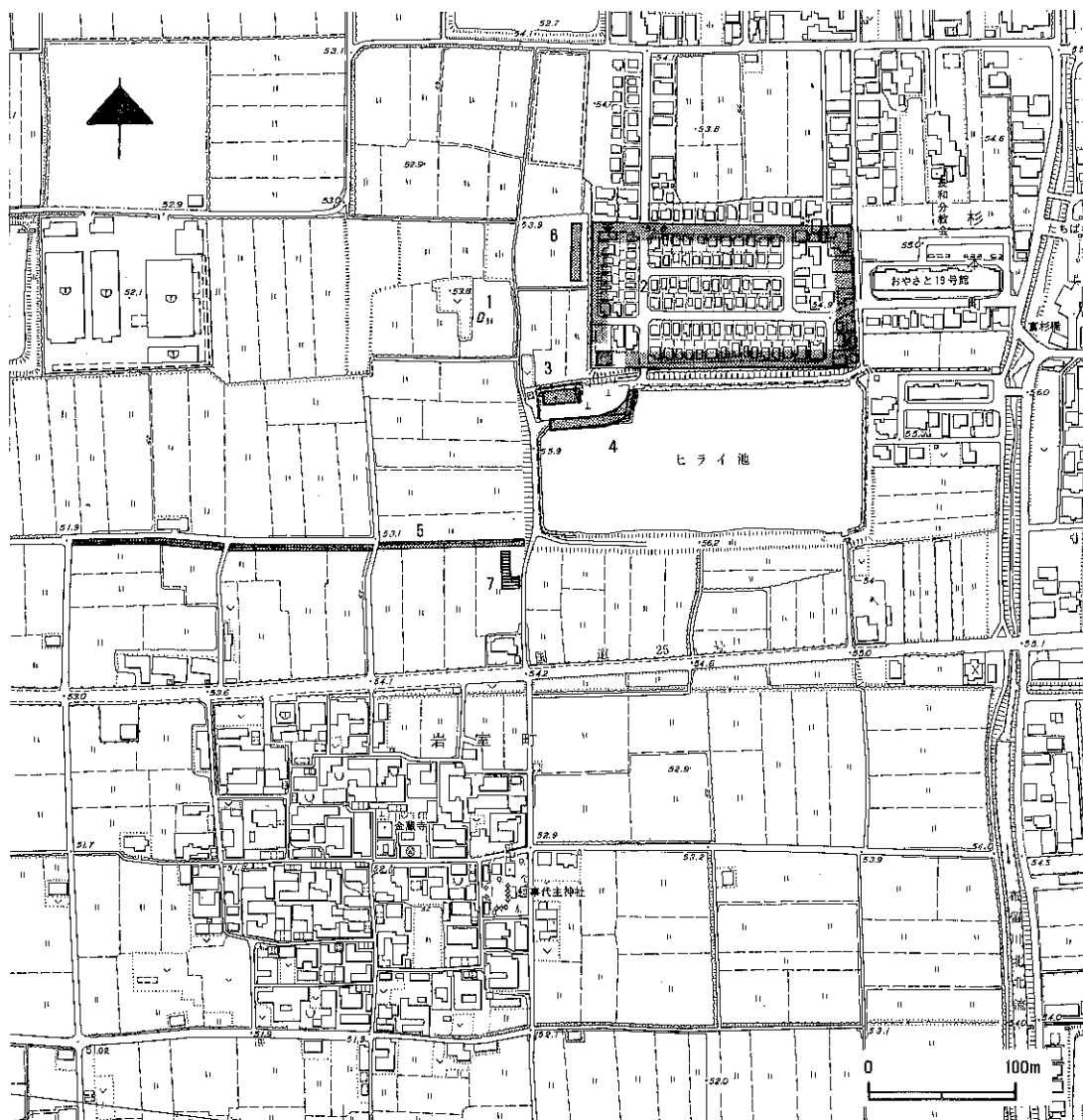


図2 調査地点図 (S 1/5000)

第7次調査は、ヒライ池の南西、字クラノ後地区の東部に位置する所で、350m²にわたる個人住宅建築に伴う事前調査であった。

註1 佐藤 小吉, 「山辺郡二階堂村大字平等坊石器遺跡」『奈良県史蹟勝地調査会報告書第6回』1919

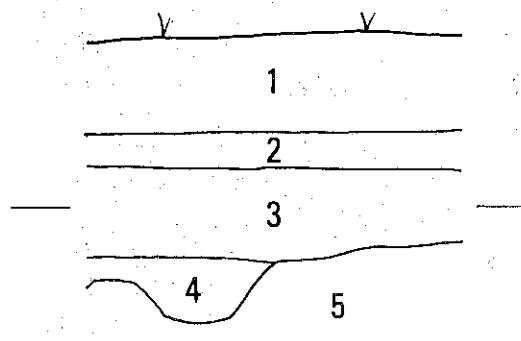
註2 白石太一郎, 前園美知雄, 『天理市平等坊・岩室遺跡発掘調査概要』1970

松田 真一, 「天理市平等坊・岩室遺跡発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報』1979

楠元 哲夫, 「岩室池古墳・平等坊岩室遺跡」『天理市埋蔵文化財調査報告第2集』1985

II 調査の概要

1. 基本土層 (図3参照)



- | | |
|---------|----------------|
| 1 耕土 | 2 茶褐色土 (床土) |
| 3 暗灰褐色土 | 4 暗灰褐色土 (素掘り溝) |
| 5 黄褐色細砂 | |

図3 基本土層図 (S 1 / 20)

調査地点は、標高52.4mの畑地で厚さ20~30cmの耕土 (図3 No. 1) 直下に茶褐色土床土層 (図3 No. 2) がある。耕土や床土層には、土器破片などの遺物が少ないが、地表面より約40cmほど下位の床土層直下には、厚さ20~30cmの暗灰褐色土層 (図3 No. 3) があり多量の弥生土器片が含まれていた。暗灰褐色土層の直下には、暗灰色土層 (図3 No. 4) 素掘り溝があり、素掘り溝の直上、床土層の直下にある暗灰褐色土は弥生時代の土器を含む単純な包含層ではなく旧耕土層と思われ、素掘り溝より出土した弥生土器片に混って瓦器碗

の破片が出土しており、調査地点付近が平安時代末から鎌倉時代には、耕作地として利用されていた可能性がある。

弥生時代の遺構は、地表面より50~60cm掘り下げた暗灰褐色土層の直下であり、調査区の北側と南側とで土層に変化があった。調査区の南側では、黄褐色細砂質層 (図3 No. 5) 上面より弥生時代の遺構を検出したが、調査区の北側では、暗茶褐色土層 (図4 No. 6) より pitや土坑などを検出した。そして中世素掘り溝や暗灰褐色土旧耕土層より多量に出土した弥生土器片が、暗茶褐色土層を攪乱したために混入したことが判明した。

また調査区の南側で検出した黄褐色細砂質層と比べて北側で検出した暗茶褐色土層は、黄褐色細砂質層より20~30cm低位置で検出し、調査地点が弥生時代の頃より南から北に向かってゆるやかな傾斜をなしていたことが判断される。

そして暗茶褐色土層の下部において、深さ1~1.2m、幅10~20mの砂礫層を中心とした弥生時代前期の自然河道跡を検出し、沖積作用に伴って弥生時代前期の末には河道が埋没し、その後、暗茶褐色土層が堆積したらしく、暗茶褐色土層中より弥生時代中期から後期にかけての遺構を検出した。また調査区の南側に比べて北側に向かって低くなっていた原因も自然河道に伴う落ち込み状の痕跡が弥生時代前期以降においても残っていたためと考えられる。

2. 弥生時代前期の遺構 (図4, 5参照)

弥生時代前期の遺構は、溝1本、土坑4基、砂礫層からなる自然河道を検出した。

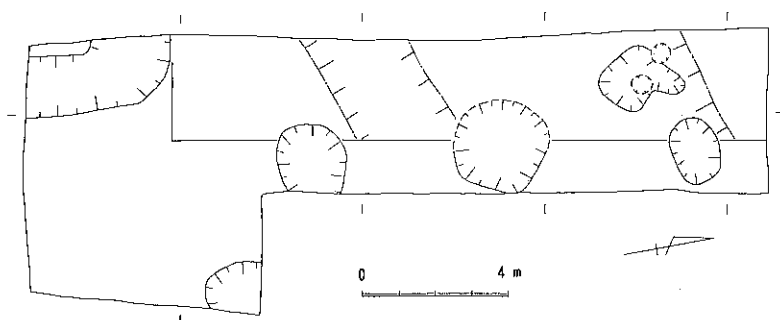


図5 弥生時代前期の遺構平面図（S 1/200）

自然河道

北東から南西方向に延びる深さ 1～1.2mの河道跡で、時間の経過に伴って河幅が縮小し河道の機能を失ってゆく状況を層位的に検出した。

河道の初期 自然河道No.17, 18, 23, 24層を中心とした河道の下位に堆積していた砂礫層の段階。調査区の北端部で検出した黒色粘質土層（図4 No.28）を河道の北岸基盤層とし、河道の南岸は確認できなかった。おそらくは弥生時代前期前葉頃の河道の大きさが幅15～20mを越す大きな河幅であったと思われ、調査区の中央部で北東から南西へ流れる水流の痕跡を検出した（図4 No.17）。

河道の縮小期 自然河道No.11～14層を中心とした河道の上位に堆積した砂礫層の段階。黒色粘質土層（図4 No.28）を北岸とし、調査区の中央部で検出した灰色砂礫層（図4 No.16）を南岸ベース層とした幅10～12m、深さ 0.5～0.8mの河道跡である。また河道の縮小に伴って水流部の位置が北岸よりの地点へ変化していた（図4 No.14）。土坑55, 58は、同時期に河道の南岸に掘り込まれた遺構である。

溝-01

調査区の南端で検出した幅 1m、深さ 0.4mの南東から北西へ延びる溝で、溝内にはやや砂質の黒色粘土（図4 No.20）が堆積し多数の弥生時代前期の土器片が出土した。

溝は、自然河道の縮小期から埋没し機能を失ってゆく頃にかけて存在していたと思われる。

土坑-55

自然河道の河幅が沖積作用によって縮小した頃の遺構で、自然河道No.11～13層と平行する時期に河道の南岸に掘り込まれた土坑である。径 2m、深さ40～50cmの円形土坑で、茶灰色細砂層（図4 No.22）において検出し、灰色砂礫層（図4 No.23）まで掘り込んでいた。

土坑-56

自然河道の機能が停止した後に掘り込まれた遺構で、径 2.5m、深さ50cmの円形土坑である。出土遺物が無いが弥生時代前期の土坑である。

土坑-57

自然河道の機能が停止した後に掘り込まれた遺構で、一辺 1.5m、深さ50cmの不定形な土坑である。

土坑-58

土坑-55と同じく自然河道の河幅が縮小した時期に河道の南岸において掘り込まれた土坑で、調査区の東端部で検出したため遺構の全形が定かでないが、径 2m、深さ50cmの円形土坑と思われる。土坑内より壺形土器を含む弥生時代前期の土器が出土した。

3. 弥生時代中・後期の遺構 (図4, 7参照)

弥生時代前期の自然河道が埋没後、暗茶褐色土 (図4 No. 6) を主体とする弥生時代中・後期の表土層が形成したようである。調査地点では、最後まで流路であった所に暗茶褐色土層が残っていたが、やや地形が高くなる調査区の南端では、暗茶褐色土層がなく中世以降に攪乱を受けたものと思われる。おそらく調査地点の付近は、自然河道の埋没後に暗茶褐色土層による地表土が形成され、河道の痕跡を残しながら20~30cm前後の凹凸のある地形が広がっていたものと解される。

中・後期の遺構は、暗茶褐色土層中より検出したもので、多数の pit と土坑を確認した。

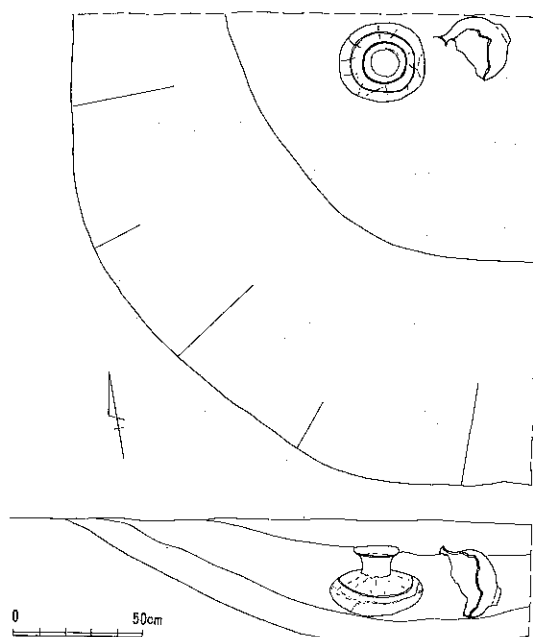


図6 土坑-58 土器出土状況図 (S 1/30)

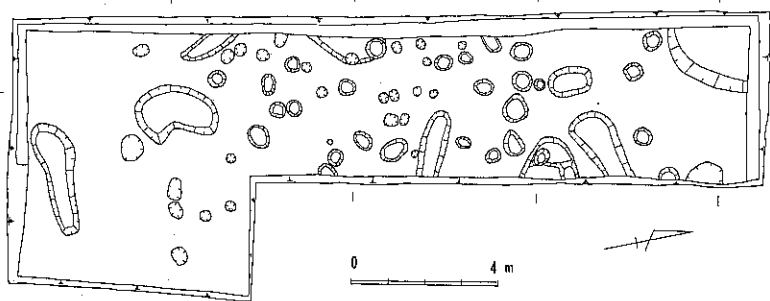


図7 弥生時代中、後期の遺構平面図 (S 1/200)

土坑-02

調査区の北端部で検出した遺構で全形が定かでない。予測であるが径 4～5m、深さ40cmの円形土坑と思われる。土坑内より弥生時代中期（第三様式）の土器片が出土した。

土坑-09

調査区の北東部で検出した遺構で全形が定かでない。径 2mの不定形な形状をなし、土坑内より弥生時代中期（第三様式後半）の土器が出土した。

土坑-31

調査区の南端部で検出した溝状の土坑で、長さ 3m、幅 0.7～1m、深さ40cmである。土坑内より弥生時代後期後半の土器が出土した。

調査区で検出した弥生時代後期の遺構は、土坑-31のみで、他の pitや土坑は弥生時代中期（第三様式～第四様式）に伴う遺構であった。

III 出土土器について

自然河道より出土した弥生時代前期の土器を中心に図化したので報告しておく。

自然河道・灰褐色砂層（No24層）出土土器（図8参照）

自然河道の南半部で検出した最も古い段階の砂礫層で、出土土器は非常に少ない。

壺（No. 1） 口径12.8cm、胴径23.5cmの遠賀川系土器の特徴をよく残した壺で、頸部に1条と胴部上半に3条の篋描沈線文を施文している。口縁部内面と沈線文帯に赤色の彩文を施している。

甕（No. 2） 口径25cmの胴部上半に張りをもつ甕で、口縁端部に刻み目と胴部上位に1条の篋描沈線を施文している。

自然河道・灰色砂礫層（No23層）出土土器（図8参照）。

灰褐色砂層の直上に堆積していた層位で、少量の土器片が出土した。

壺 口径41cmの大形壺（No. 3）、口径11.1cmのいわゆる遠賀川系土器の壺（No. 5）、遠賀川系土器の壺とはやや形の異なった口径18.4cmの壺（No. 4）の3種の壺が出土している。

壺蓋 口径10～11cmの笠形の蓋で、口縁部付近に2孔一対の孔を2ヶ所にもつ蓋（No. 6）、口縁部外面に2条の沈線を施文した削り出し凸帯をもち、天井部中央に有孔の蓋（No. 7）の2種の壺蓋が出土している。

甕 胴部上半にゆるやかな張りをもち口縁端部に刻み目を施した口径18～24cmの中形甕で、口縁部の直下に2条の篋描沈線を施文した甕（No.13, 14）、口縁端部の刻み目を端部下半に施した甕（No.12）などがある。

鉢（No.10） 口頸部に最大幅をもつ口径20cmの土器で、口縁端部に刻み目と胴部上位に篋描沈線文2条を施文している。

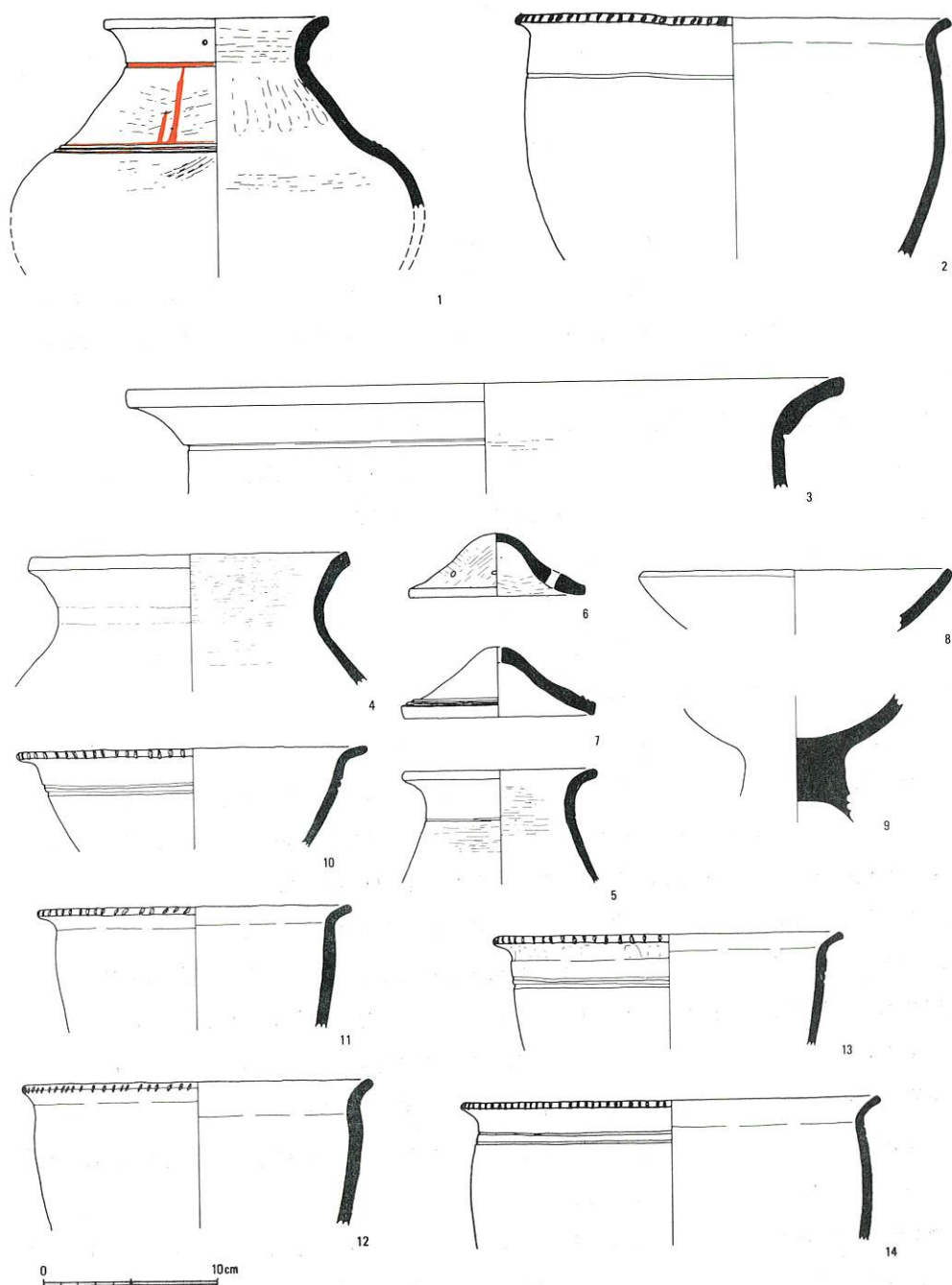


图8 土器実測図 (S 1 / 4)

1, 2 自然河道No.24層
3 ~ 14 自然河道No.23層

高坏 中実で幅の厚い脚部と(Na. 9), 口径18cmの碗形の坏部をもつ高坏(Na. 8)が出土している。

自然河道・暗灰色砂層(Na.18層)出土土器(図9参照)

自然河道の北半部において河道の最下部で検出した層位で、層位的に灰褐色砂層と同時期の可能性もある。

壺 いわゆる遠賀川系土器の特徴を残した口径12cmの壺(Na.15), 広口状の口縁形態をした口径16cmの壺(Na.16)の2種が出土している。

壺蓋(Na.17) 口径13cmの立ち上がりが低い笠形の蓋で口縁部付近に孔を施している。

甕 口径21.5~26cmの中形甕で、胴部の張りが口縁部とほぼ等しく2条の篋描沈線文を施文した甕(Na.18), 張りのない胴部に1条の篋描沈線文を施文した甕(Na.19), 口縁端部下半に刻み目を施した甕(Na.20)などが出土している。

自然河道・暗灰色砂層-細砂を含む-(Na.17層)出土土器(図9参照)

自然河道の下位に堆積していた灰褐色砂層(Na.24層)と暗灰色砂層(Na.18層)をベースにして形成した水流部の堆積層で、时期的にはベース層と同時期の可能性がある。

壺 遠賀川系土器の特徴をよく残し、口縁部と頸部との境を削り出し成形した口径12cmの壺(Na.21), 胴部上半に3条の篋描沈線文を施文した壺(Na.22)の2点が出土している。

甕(Na.26) 口径22.5cmの胴部上半に強い張りをもつ甕で、口縁端部に刻み目を施し口縁部直下に2条の篋描沈線文を施文した削り出し凸帯を成形している。

鉢 口径19cmの口縁端部下半に刻み目と口縁部直下に1条の篋描沈線文を施文した小形鉢(Na.23), 口径24~27cmの口縁部削り出し仕上げ(Na.24)や胴部上半に3条の篋描沈線文を施文した(Na.25)中形鉢, 口径39.5cmの口縁部を削り出し仕上げした大形鉢(Na.27)などが出土している。

自然河道・灰色砂層~暗灰色砂礫層(Na.12~13層)出土土器(図10参照)

自然河道の沖積作用が進み河道の幅が縮小した段階に堆積した砂礫層である。

壺 いわゆる遠賀川系土器の壺と比べて口縁部の発達が目立ち始めた形態で、頸部に2条の篋描沈線文を施文した口径14cmの壺(Na.28), 頸部に張り付け凸帯を施した壺(Na.29), 胴部上半に削り出し凸帯をもつ壺(Na.30), 胴部上半に張り付け双頭渦巻文を施した壺(Na.32), 篋描沈線文に竹管文を施した壺(Na.33)など多彩な文様を施文した壺が出土している。

壺蓋 口径10.5~11.5cmの笠形の蓋で、天井部中央に孔をもつ蓋(Na.41), 天井部中央に角状の突起をもつ蓋(Na.42)などが出土している。

甕 口径21~28cmの中・小形甕と口径44.5cmの大形甕がある。中形甕は、張りの小さい胴部と口縁端部に刻み目を施した甕(Na.35, 38), 口縁端部に刻み目を施し胴部に2条の篋描沈線文を施文した甕(Na.36), やや張りのある胴部に2条の篋描沈線文を施し、口縁端部にも1条の篋描沈線文を施文した甕(Na.37), 体部上半にわずかな張りがあり2条の篋描沈線文を施文し、底部付近をケズリ仕上げした器高21.5cmの完形で出土した甕(Na.54)がある。

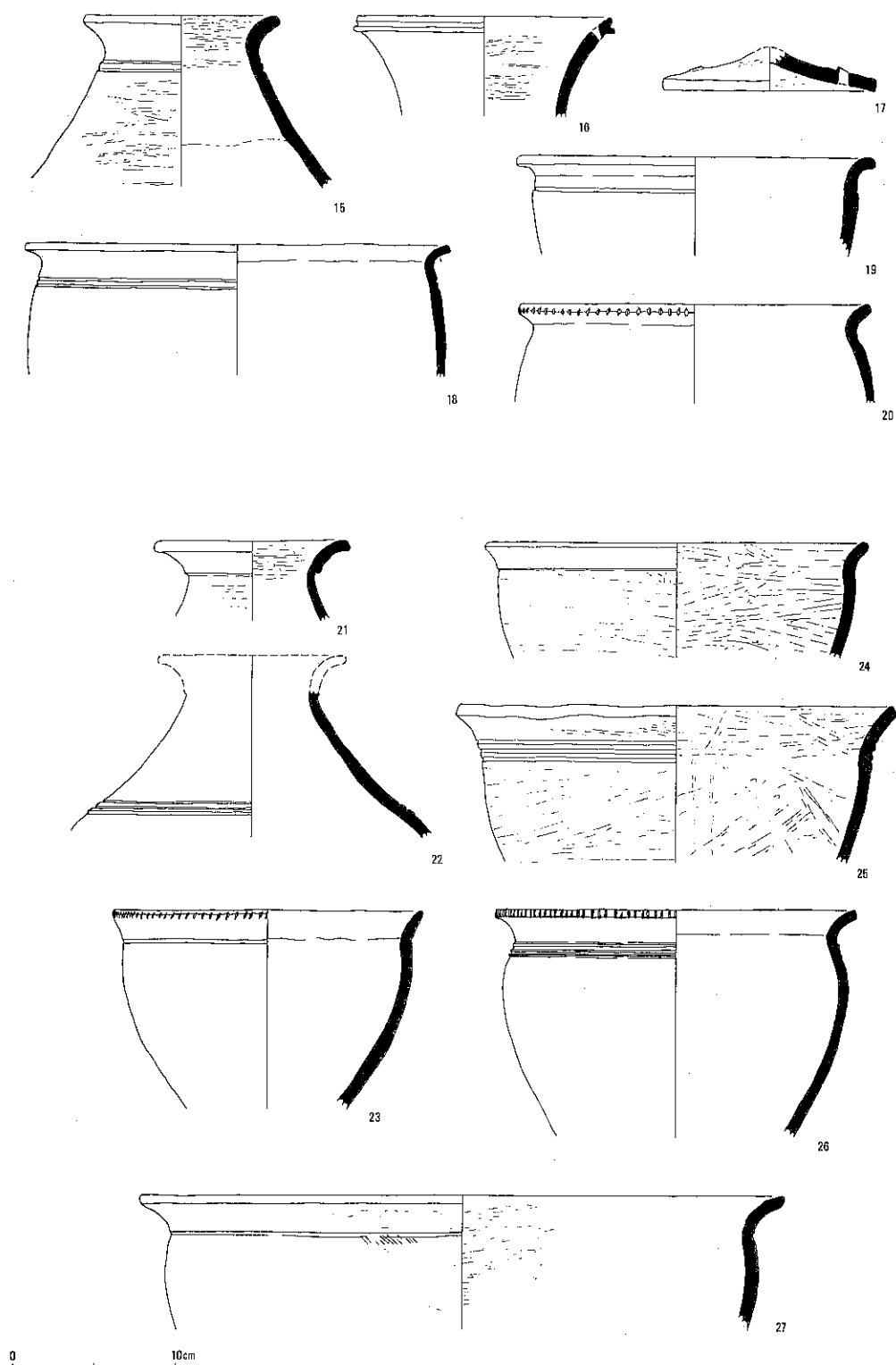


図9 出土土器実測図 (S 1 / 4)

15～20 自然河道No.18層

21～27 自然河道No.17層

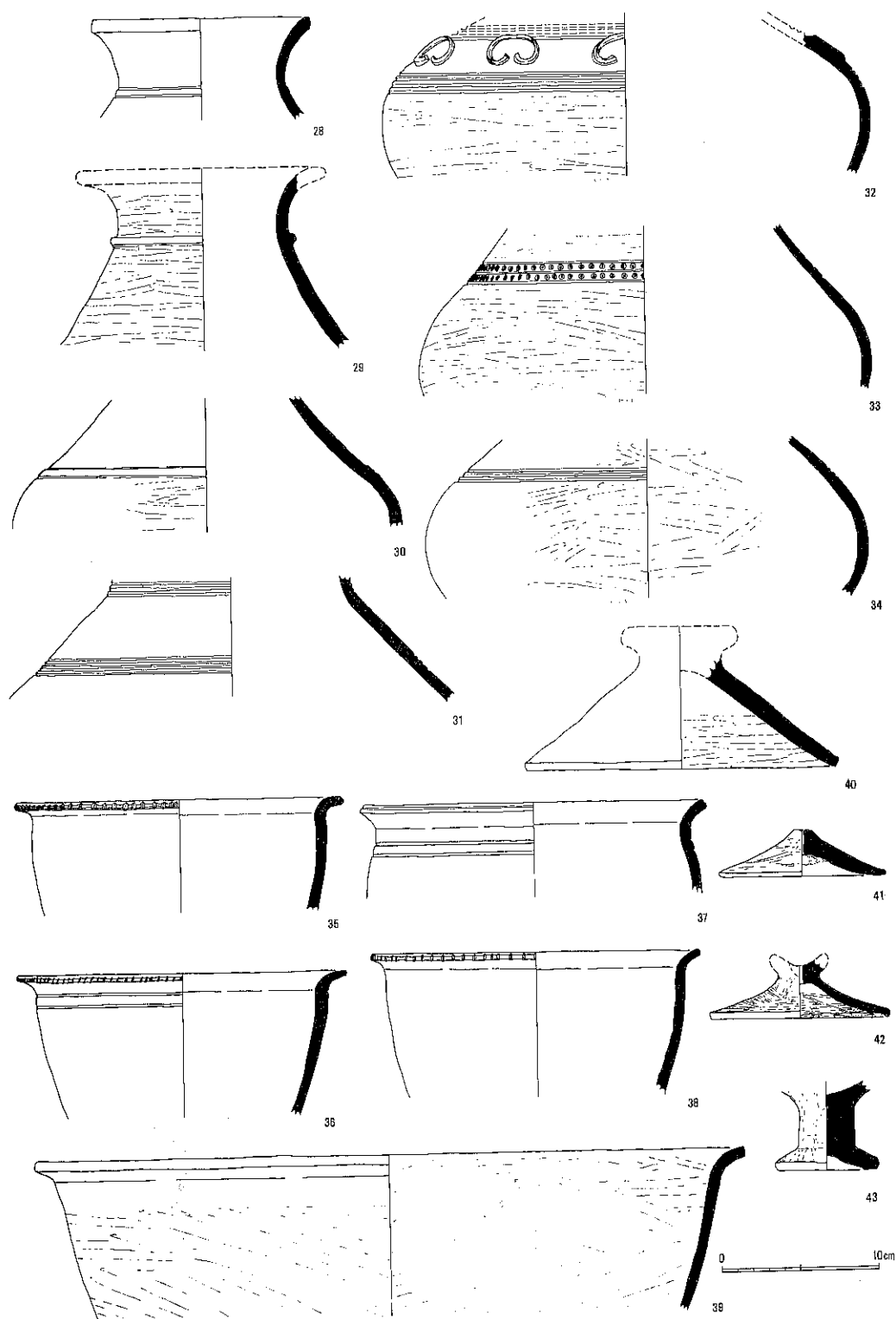


图10 土器実測図 (S 1 / 4) 28~43 自然河道No12層

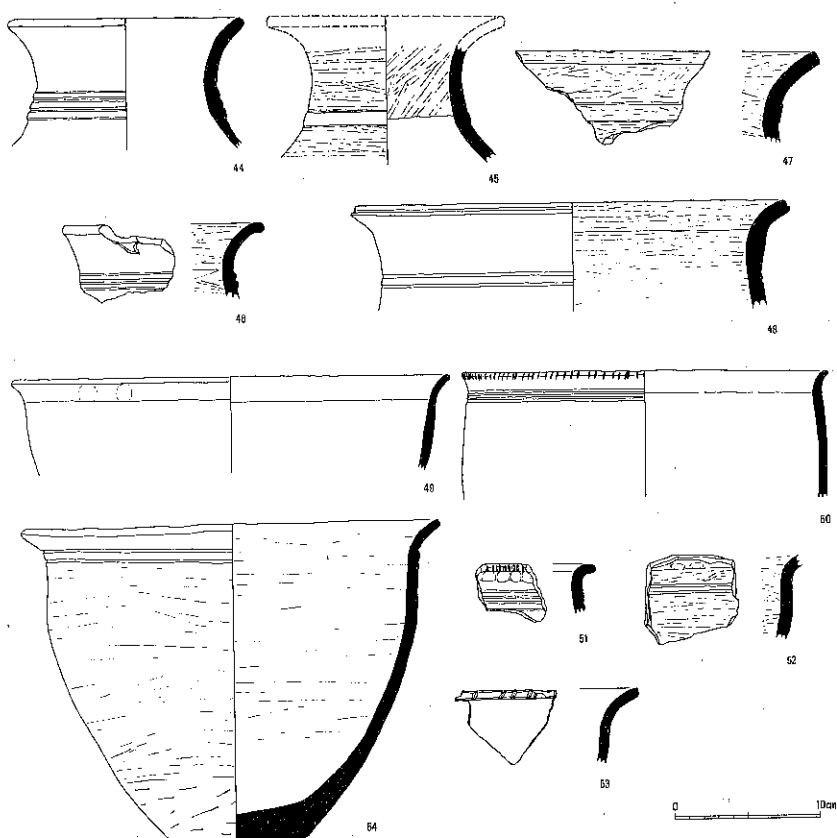


図11 土器実測図 (S 1 / 4) 44~53 自然河道No.11層
54 自然河道No.12層

大形甕は、胴部に張りがない鉢に似た形態で胴部全面を横方向にナデ仕上げしている。

甕蓋 (No.40) 口径19cmの小形甕に使用する蓋と思われる。

高坏脚部 (No.43) 脚高 5cmの小形高坏に伴う脚部と思われ、中実柱状仕上げの土器である。

自然河道・灰色砂層 (No.12層) 出土土器 (図11参照)

灰色砂層 (No.12層) は砂層中に荒砂を含んでいたが、直上に堆積していた灰色砂層 (No.11層) とは区分して検出した。よって時間的にはNo.12層より新しい。

壺 口径16cm前後の壺 (No.44, 45) と口径30cmを越す幅の大きい口縁の壺 (No.46~48) の2種がある。前者の壺は、いわゆる遠賀川系土器の壺とくらべて口縁部が発達し、長頸化への傾向を帯びはじめている。No.44の壺は、2条の篋描沈線文を施文した削り出し凸帯、No.45の壺は、幅のある削り出し凸帯を頸部に施している。後者の壺には、頸部に削り出し凸帯を施した壺 (No.47)、幅のある張り付け凸帯に1条の篋描沈線文を施文した壺 (No.46)、頸部に2条の篋描沈線文と口縁端部に1条篋描沈線文を施文した壺 (No.48) がある。

甕 口径26cm前後の中形甕で、3条の篋描沈線文と湾曲の小さい口縁部に端部下半において刻み目を施した甕 (No.50) , 篋描沈線文を4条施文した甕 (No.51) がある。

鉢 (No.49) 口径30cmの無文の大形鉢で、全面をナデ調整で仕上げている。

溝-01出土土器 (図12参照)

壺 すでに遠賀川系土器の特徴的なスタイルとは異なり、口径17cmのやや長頸の頸部に1条の篋描沈線文を施文した広口壺 (No.56) や、頸部に3条の篋描沈線文を施文した口径33cmの大形壺 (No.55) がある。

甕 口径17.5~20.5cmの中小形甕と口径29.5cmの中形甕がある。中小形甕には、口縁端部に刻み目と口縁直下に篋描沈線文3条を施文した甕 (No.59) , 口縁端部に刻み目と口縁直下に篋描沈線文1条を施文した甕 (No.61) , 口縁端部に刻み目と口縁直下に3条の篋描沈線文を施文し、胴部に明瞭な縦ハケ調整を残す甕 (No.62) がある。

中形甕は、強く外反した口縁部に刻み目や篋描文を施さない無文の土器である。(No.60)。

鉢 (No.58) 口径15cmの小形鉢でナデ調整で仕上げた土器。

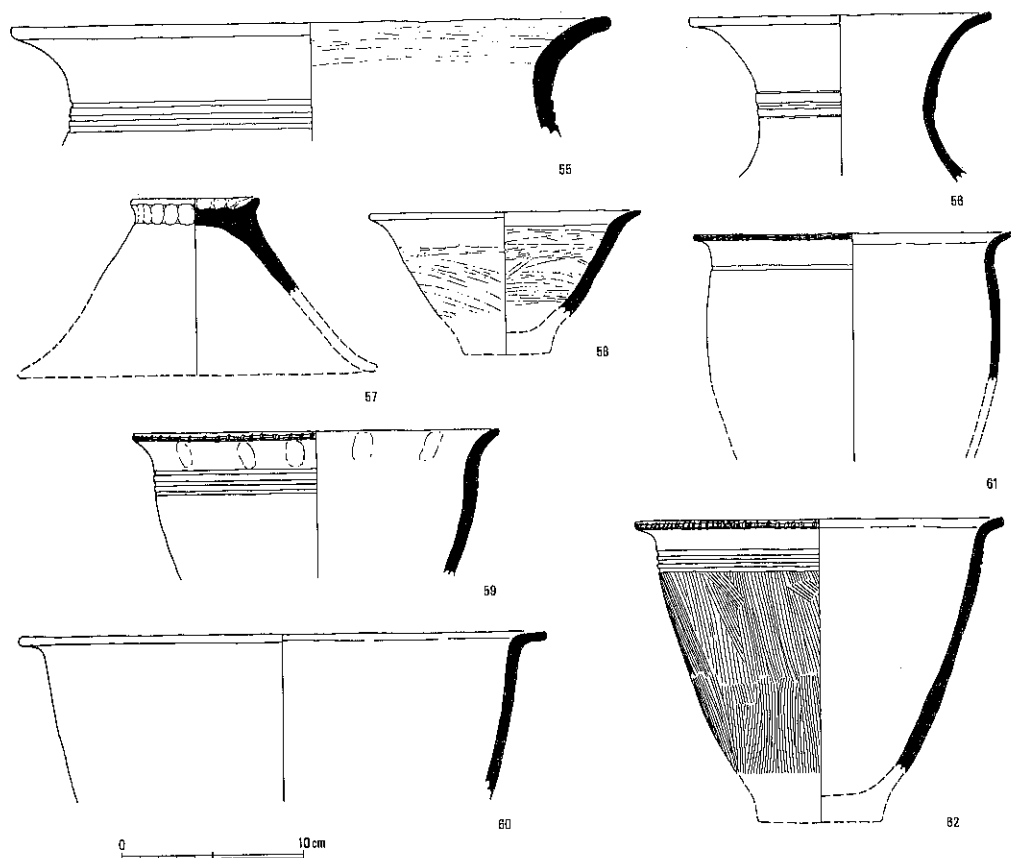


図12 溝-01出土土器 (S 1 / 4)

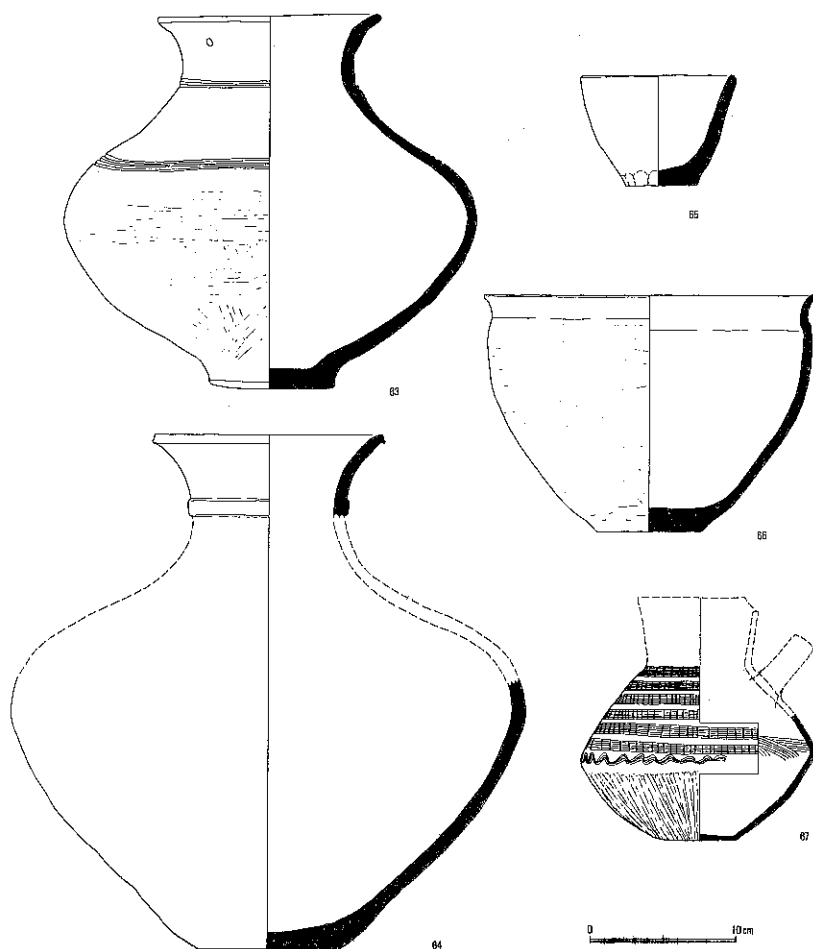


図13 土坑出土土器 (S 1 / 4) 63 - 土坑 66 - 土坑55
64、65 - 土坑 8 67 - 土坑 9

甕蓋 (No.57) 天井部がやや薄手作りの蓋。

土坑-58出土土器 (図13参照)

壺 いわゆる遠賀川系土器のスタイルからやや口頸部が発達した形態に口径15.5cm, 器高25.5cmの胴部が強く張った壺で (No.63), 口縁部には1孔を施し, 頸部に2条, 胴部上半に3条の篦描沈線文3条を施文している。

口径16cmの頸部に削り出し凸帯を施した壺は (No.64), 口縁端部に面取り成形をおこい、口頸部の発達が目立ち胴部の張りも強い。

鉢 (No.65) 口径11cm, 器高 7.5cmのコップ形の形態をした小形鉢で, 底部付近に指圧痕を残している。

土坑-55出土土器 (図13参照)

鉢 (No.66) 口径23cm, 器高16cmの中形鉢で, 口縁部の立ち上がりが特徴的でゆるやかに外湾

し、張りの小さい胴部に厚みのある底部の土器、外面はナデ調整。

土坑-09出土土器（図13参照）

水差（No.67） 口縁部と把手が欠失しているが、ソロバン玉状に張り出した胴部に櫛描簾状文と波状文を施文し、特に波状文が把手側とは反対の正面に半周のみ施文している。第三様式後半以降の土器である。

Ⅳ 出土石器について

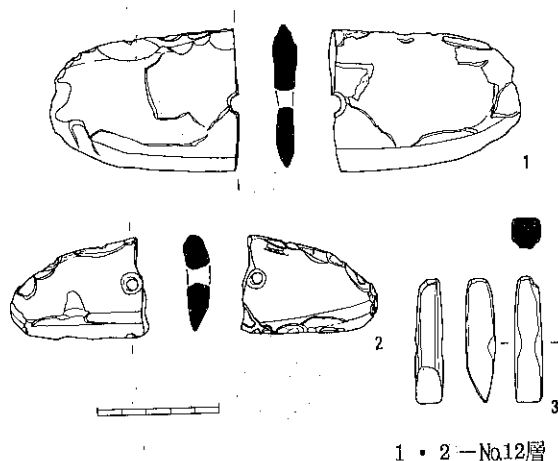


図14 石器実測図（S 1 / 4） 1・2 - No.12層 3 - 土坑07

弥生時代中・後期の遺構を検出した暗茶褐色土（図4 No. 6）より多数のサヌカイト破片が出土している。また弥生時代前期の自然河道に伴う砂礫層中から石包丁と柱状片刃石斧が出土したので図化した（図14参照）。

大形石包丁（No. 1） 幅 5.8cm，厚さ 0.8～1cm，残存長 7.6cmの色調灰白色の流紋岩を利用した石包丁で，厚みのある上部には打撃痕があり，厚みの少

ない下部には研磨による刃部が成形されている。紐孔は2孔と思われる。

小形石包丁（No. 2） 幅 4cm，厚さ 0.9cm，残存長 5.5cmの灰白色の流紋岩を利用した石包丁で，肩部から刃面にかけて打撃痕が残っている。紐孔は2孔と思われる。

柱状片刃石斧（No. 3） 長さ 5cm，幅 0.9～1.1cm，厚さ 0.9～1.2cmの緑色を帯びた片岩製の小形石斧で，挟りが入っている。ほぼ完形。

V ま と め

7次調査の結果，ヒライ池の南側から西側にかけて弥生時代前期から中期にかけての遺構が多い地点であることが判明した。

特に興味深い点は，弥生時代前期の段階に自然河道が流れていたにもかかわらず，中期（第三様式～第四様式）には居住可能な地形へと変化していたことで，弥生時代前期と中期とでは，平等坊・岩室遺跡の地形的な環境がかなり変化していた可能性が強い。

近年の調査では，第2次坪井遺跡の調査において弥生時代前期の土器片を包含した自然地形に伴う大きな落ち込み（河4）を検出しているが，弥生時代中期（第三様式～第四様式）になると pit

や土坑を中心とする居住地帯へと地形が変化していた例^{註3}を確認しており、大和盆地の低地帯に立地していた弥生時代集落の特徴的な様相と思われる。

註3 佐々木好直, 「坪井遺跡第2次調査概要」『奈良県遺跡調査概要(第二分冊)』1983



写真1 自然河道より出土した完形の甕(図11・No.54)



中・後期の遺構（南方より）



中・後期の遺構（北方より）



前期の遺構と河道跡（南方より）



前期の遺構と河道跡（北方より）